

天保十四年の キャリアオーバー

五十嵐貴久

第七回

第四幕 勸進帳

一

天保十四年、師走晦日。しわすみせか

明け方から急に冷え込みが厳しくなり、夜半やはんから降り始めていた雨は雪に変わっていた。

七代目、という声に團十郎だんじゅうろうは目を開けた。目の前に不安そうな表情を浮かべた談志だんしとお葉おはが立っていた。

背中いが痛いたえな、と團十郎はつぶやいた。

昨夜遅く、向島むこうじまの長命寺ちやうめいの門を叩くと、住職が迎えてくれたが、蛭ひるの仁吉じんきちに突き飛ばされた際、足をくじいていたお葉の手当をする

方が先で、相談をしようにもできなかった。

熱を出したお葉、そして疲れ切った談志が倒れるように横になったが、團十郎は本堂の板壁を背に座り、夜が明けるまで動かなかった。目は閉じていたが、一睡いっすいもしていない。

いつだってそうだ、と唇からつぶやきが漏れた。

「初日の前は眠れねえ。そんな顔すんな、お葉さん。熱は下がったのか？」

どうにか、とお葉がうなずいた。段取りは全部ここに入ってる、と團十郎はこめかみを指で叩いた。

「水を一杯くれ。他には何もいらねえ」

どうするんだい、とお葉が足首を押さえながら座った。

「鶴松さんが捕まっちゃまったんだよ。まさか、南町奉行所の賭場に乗り込むなんて言わないだろうね」

決めてた話じゃねえか、と談志が差し出した湯呑み茶碗を團十郎は受け取った。そうは言うが、と談志が顔をしかめた。

「七代目、本気かい？ 鶴松さんが捕まってるんだ。誰あやを殺めたわけでもねえが、目明めあかしや下したっ引きと刀を抜いてやりあってる。どれだけの罪になるか、おいらもわからねえけど、一日二日で奉行所から出られるはずもねえだろう。吟味ぎんみには数日かかるし、そのまま小伝馬町の牢屋ちげにぶち込まれるに違ちがえねえ」

「だろうな」

確かに鶴松さんは頭が切れる、と談志が先を続けた。

「ヤクザ者に町娘が襲われてると勘違いして助けに入ったとか、言
い訳はいくらでも作れるだろうよ。いくら鳥居とりいでも、それじゃ死罪
にはできねえ。言ってみりゃあ、ただの喧嘩だからな」

ひとつうなずいて、團十郎は湯呑みに口をつけた。

「おい、こいつは酒じゃねえか」

はんにやと般若湯だよ、と談志が笑った。

「だけどさ、七代目。もしあんたが寛永寺かんえいの僧、法良ほうりょうに成り代わっ
て鳥居かげとみの陰富とばの賭場に入り込み、イカサマで奴から金を奪ったらど
うなる？ 鳥居はとんでもねえ嫌な野郎だが、馬鹿じゃねえ。あん
たの後ろに鶴松さんがいることに気づくだろうさ。御法度の陰富の
取り置き金の百万両だから、表ざたにはできねえが、間違はなく野
郎は鶴松さんを殺すぜ。てめえで手を下すまでもねえ、小伝馬町ろうなぬしの
牢名主に銭でも掴ませりゃ、それでいいんだからな」

この般若湯はうめえな、と團十郎は湯呑みを突き出した。

「もう一杯くれ。いい気付けになる」

馬鹿言ってるんじゃないよ、とお葉が湯呑みを取り上げた。

「止めようよ、こんなこと。ただの喧嘩しかりなら、叱責かりようか過料を払うか、
重くたつて叩きぐらいで済むだろうけど、殺されちまったらどうす

るの？ そんなことになったら——」

そいつを考えていた、と壁を背にしたまま團十郎は腕を組んだ。

「おれだってそれぐらいわかってる。百叩きなら、鶴松は笑って耐えるだろう。だが、殺されちまったら取り返しがつかねえ。止めた方がいいってのは、その通りかもしれねえな」

「そうだよ、と膝でにじり寄った談志に、だがそれじゃ鶴松の男のいちぶん一分が立たねえ、と團十郎は言った。

「湯島千両陰富で、南町奉行鳥居耀蔵ようざうから取り置き金の百万両、ついでに留札の褒美金を巻き上げるって絵図を描いたのは鶴松だ。そのためどれほど苦労してきたかは、おれよりあんたの方がよっぽどわかってるだろう。男には意地つてもんがある。命惜しきにそいつを捨てちまったら、後は屑くずみてえに生きていくしかねえ。そんなことを鶴松が望んでると思うか？」

「格好つけてるんじゃないよ、馬鹿！」

お葉が團十郎の頬を平手で張った。

「いいんだよ、生きてさえいれば。命より大切なものなんて、この世にはありやしない。そんなこともわからないのかい？ 意地だ面子だ誇りだ、男はそんなことばかり。どうかしてるよ」

どうかしてなきやこの世は面白くねえ、と團十郎は張られた頬を撫でた。

「いいか、鶴松は最後にこう言った。七ノ字、後のことは任せたつてな。鶴松が捕まっちゃった今、おれが奴の代わりを務めるしかねえ。あんたらにも従ってもらうぜ」

どうする気だい、と談志が震える声で言った。決まってるじゃねえか、と團十郎は立ち上がった。

「もう幕は上がっちゃったんだ。芝居を始めるしかねえじゃねえか。師匠とお葉さんは、湯島へ行ってくれ。段取り通り、筋を進めるんだ」

あたしは行かない、と正座したお葉が首を振った。

「冷たい人だよ、見損なつたね。鶴松さんを殺してでも、百万両が欲しいのかい？ そんな人だとは思わなかった。口は悪いけど、七代目は優しい人だって思ってたのに……」

何と言われても構わねえが、金のためじゃねえ、と團十郎は静かな声で言った。

「こいつは鶴松のためだ。今頃、鳥居は鶴松をひでえ拷問ごうもんにかけているだろう。口を割るような男じゃねえが、万が一でもおれのことを喋っちゃったら、南町奉行所の門をくぐった途端、おれの首が飛ぶ。法良に化けるとわかった時も同じだ」

喉元のどもとに手を当てた。だから止めようって言ってるんじゃないか、とお葉が言った。

「今なら間に合うんだよ、七代目。百万両なんかどうだっていい。黙って我慢してりや、鶴松さんは戻ってくる。そうだろ？」

違うな、と團十郎はきれいに剃^そりあげている頭に手をやった。

「お葉さん、そりやちよいと丁見が違う。鶴松だって、おれだって、黙って耐えてた方が特なのは百も承知よ。何でもお上の言う通りに致しますってうなずいてりや、とりあえず命だけは何とかなるだろう。だがな、おれたちはそんなことに飽き飽きしてるんだ。鳥居に生かされるんじゃなく、てめえの力で生きてえんだよ」

「でも……」

お葉さんだつてわかつてるはずだ、と團十郎は言葉を継いだ。

「命より大事なものなんかねえっていうのは本当だよ。だが、生かされているだけの命は、本物の命じゃねえ。おれも、鶴松も、誰だつててめえの命で行きたいと思ってる。そうだろう？ それに、鳥居の野郎はそんなに甘くねえ」

七代目の言う通りかもしれないねえな、と談志がうなずいた。

「話がどう転んでも、鳥居は鶴松さんを殺すつもりなのかもしれねえ。生かしておけば面倒なことになるのは、わかりきった話だ。まだ殺しちやいねえだろうが、それは鶴松さんがどんな手を使って金を奪おうとしているのか探るためで、目明かし相手に喧嘩したとか、そんなこたあ関係ねえんだらう」

お葉の美しい瞳から涙がひと筋こぼれた。談志が細い肩に手を置いて、小さくうなずいた。

七代目にもしものことがあったら、その場で自分も腹を切ると鶴松は言ってた、と團十郎は顔を背けた。

「実はな、お葉さん。おれもあの時決めてた。鶴松を一人じゃ死なせねえってな。ああいう男だ。おれがいなけりや、三途さんずの川を一人で渡りきれねえだろう」

馬鹿なことばっかし、とお葉が泣き笑いの顔で言った。おれのことをどう思ってるか知らねえが、と團十郎は大きな鼻をこすった。

「歌舞伎役者にだって男気がある。そいつを見せてやるよ」

七代目、と談志が座ったまま顔を上げた。

「あんた……死ぬ気なのかい？」

さあな、と團十郎は横を向いた。

そこまでの覚悟があるのかと問われれば、応おうとは言えない。まだこの世に未練もある。

だが、仕方ない。これも浮世うきよの義理だ。

夜明けまで考えていたのは、鶴松のことであり、鳥居のことだった。

何があっても、鳥居が鶴松ほうめんを放免するはずがない。鶴松が陰富について調べ抜いていることを、鳥居は気づいている。そうであるな

ら、殺すしかない。

たった今、この刻も、鳥居は鶴松の口を割らせるため、厳しい吟味を続けているはずだ。それには拷問も含まれる。

何をされても、鶴松が口を割ることはないとわかっていて。團十郎のどの字も言わないだろう。

（おれが法良を装っていると鳥居にわからなければ、まだ勝ち目はある）

「あの妖怪から百万両を奪って、吠え面かかせてやる」

ぼつりとそう言った。鶴松が殺されたとして、それと引き換えになるのは、すべてを失った鳥居の間抜け面だけだ。

帳尻は合わない。鶴松が死に、團十郎も殺されるだろう。そして、鳥居は生き残る。

算盤では大損だが、一矢報いることはできる。それならそれで勘定は合う、というのが團十郎の腹積もりだった。

「師匠、例の連中は？」

寛永寺の近くで見張ってる、と談志が答えた。

例の連中とは、寄席に出ていた色物の軽業師である。今日のための準備を進めている間、何度か團十郎も顔を合わせていた。

「お葉さん、あんたも言いたいことが山のようにあるだろう。だがな、鶴松のことを本気で想っているなら、奴の男の一分を立ててや

つてくれ。奉行所から鶴松を救い出すことはできねえ。奴の命は鳥居の手中にある。どうしようもねえのは、わかっているはずだ」

声を立てないまま、お葉が両の拳を強く握った。頬が涙で濡れていた。

「泣いてはいけません」

鶴松の声色を使った團十郎をお葉が見つめた。

こいつは鶴松からの言伝だ、と團十郎はうなずいた。

「もし自分に何かあった時には、お葉さんにそう伝えてくれと頼まれていた。お葉さんには、いつものお葉さんでいてほしい、男勝りで氣っ風きぶがよくて、明るく笑っているお葉さんでいてくれってな。鶴松は馬鹿だから、てめえの口じゃ言えなかったが、あんたのことを好いてたんだよ」

あんたって呼ぶなと何度言ったらわかるんだい、とお葉が涙を拭いた。

「馬鹿はそつちだよ、七代目。同じことを何度言わせれば気が済むんだい？」

それでこそお葉さんだ、と團十郎は手を叩いた。

「いいか、こいつは鶴松の仇討あだうちだ。おれに言わせりゃ、忠臣蔵だよ。まだ死んじやいねえが、仇討ちの前借りだ。段取りは全部奴が作った。おれたちはその通りに動けばいい。じゃあな、おれは行く

ぜ。運が良ければ、また会えるかもしれねえな」

気をつけてな、と談志が言った。そりゃこっちの台詞だ、と團十郎は背を向けて本堂を後にした。

一一

鶴松はどうだ、と奉行所内の私邸の縁側で、鳥居がつぶやくように言った。庭の隅で、蛭仁が伏せていた。

「ひと晩、石を抱かせましたが、何も吐きやしませんでした」

何枚抱かせたと尋ねた鳥居に、五枚ですと蛭仁が青い顔を上げた。「信じられませぬ。あの男は音を上げるどころか、ただ笑みを浮かべるだけで……普通なら二枚でも口を割るものですが」

石抱きとは取り調べに際し行なう拷問の一種で、鞭打ちなどと比べて遥かに重い責めである。

三角形に切った棒を並べ、そこに不審があると奉行が考えた未決囚を正座させる。

その太ももに伊豆石いずいしと呼ばれる十二貫かん（約四十五キロ）の分厚い石板を乗せていく。三角になっている木の棒が牒すねに食い込む痛みは、常人なら一枚でも耐えられない。

それを鶴松は五枚乗せ、なおかつ笑って耐えているという。六十

貫の重さがかかれば、臍が折れても不思議ではない。

尋常ではない覚悟がある、と鳥居にもわかった。

どうかしてやがりますよ、と怯えたように蛭仁が言った。

「責め手の方が、気分が悪くなったと石抱きを止めたほどで……」
鞭は使ったのかと確かめた鳥居に、あの野郎はどうかしてるんですと蛭仁がうわ言のように繰り返した。

「いくら鞭で打ちすえても、悲鳴ひとつ漏らさず、ただ笑っていやがるだけで……あんな気味の悪い野郎、見たこともねえです。どうしますか」

面つらを見に行く、と鳥居は着流し姿のまま腰を上げた。向かったのは奉行所内の牢である。

数歩離れて蛭仁が従ったが、目もくれず歩を進めると、お白州しらすの裏に建っている牢の前に出た。

半地下になっており、一間一尺（約二メートル）ほどの階段を降りると、分厚い木の扉があり、そこに立っていた見張りの同心どうしんが顎あごを向けた鳥居に一礼して、扉を開いた。薄暗い廊下が左右に通っていたが、そこが南町奉行所内の牢だった。

江戸市中で罪を犯した者は、捕縛された後、吟味を受けるため一度奉行所に留め置かれる。

吟味の末罪状が決まると、叱責、あるいは過料を払って済むよう

な軽い罪の者はそれで放免され、その他はすべて小伝馬町こでんまちょうの牢屋に送られるのが習わしだった。

吟味は一度で終わらないことも多い。あるいは、罪を認めない者もいる。

その場合は吟味を続けなければならないため、奉行所内の牢に入れておくのが定法じょうほうであった。

鶴松もその一人ということになる。町娘がヤクザ者に襲われたと勘違いして、救おうとしただけだと言を変えていない。そのため、未決囚として奉行所内の牢に入っていた。

小伝馬町の牢屋は数人から十人ほどの囚人を雑居房に入れておくが、奉行所はすべて独房で、それが二十ほど並んでいる。

それと比べれば造りは簡素であるが、牢は牢である。左右の房とは分厚い土壁で仕切られているため、未決囚同士話すことはできない。

正面は太い木枠の扉だが、錠前は鉄製で、壊すことなどとてもできないし、鍵がなければ開くことはおろか、外に出ることは絶対に不可能である。

見張りは二人いて、二十の独房の前を常に巡回している。独り言さえ厳禁で、そのため牢内は静かだった。見回っている同心の足音しか聞こえないほどである。

入ってきた鳥居に、二人の同心が頭を深く下げた。鶴松はと問うと、そのまま通路の奥を指し示した。

奉行自らが牢へ来ることは、めったにない。二人の同心の顔に当惑の色が浮かんでいた。

正面から左へ歩を進めると、最奥部の独房があった。二畳もない狭さである。

その中で、海老のように体を曲げた鶴松が横たわっていた。まるで死人のようだった。

「立てませい」

同心が声をかけると、這はうようにして鶴松が立ち上がった。座りませいと命じると、そのまま正座して頭こゝろを垂れた。

離れておれ、と同心に命じてから、矢部鶴松、と鳥居は名を呼んだ。

「顔を上げよ。南町奉行、鳥居耀蔵である」

師走晦日、外は小雪がちらついている。身震いするほど寒かったが、鶴松は下帯したおび一枚の姿だった。牢内の床は水浸しになっていたが、それは蛭仁が水責めをしたためである。

鶴松が顔を上げた。顔色は真っ青である。歯の根も合わぬほど、全身を震わせていた。

「そろそろ口を割ったどうだ」

立ったまま言った鳥居に、何かの間違いですと鶴松が格子こうしになつて
いる戸を掴んだ。

「わたしは町娘が襲われていると思い、それを救おうとしただけです。まさかあのような悪相の男が目明かしとは、思ってもいませんでした」

何だこの野郎、と怒鳴った蛭仁を手で制して、つまりぬ芝居は止めよ、と鳥居は唇の端を吊り上げるようにして嗤わらった。

「お互い、腹のうちは読んでいる。そうであろう。お前は私のことを調べたようだが、私もお前のことを知っている。養父、矢部定謙さだのりを追い落とした私がそれほど憎いか？」

何のことかさっぱりわかりませぬ、と鶴松が強く首を振った。

「奉行所の目明かしや下つ引きを相手に争ったことは認めますが、わたしはあの娘さんを助けようとしただけで——」

体中痣あざだらけの姿で弱々しく叫んだ鶴松に、頑固な男だ、と鳥居は横を向いた。

「では、私の方から話すことにしよう。お前は今日、私が陰富の賭場をこの奉行所内で開くことを知っている。そして、僧を装った七代目市川團十郎を送り込み、取り置き金の百万両を奪おうと企くわだてている。違ちがうとは言わせぬぞ」

何のことでしょうかいましょう、と鶴松が正座したまま言った。この

目が節穴と思うか、と鳥居は両の眼を見開いた。

「お前の企みなど、すべてわかっている。だが、團十郎に何ができると？ 取り置いている百万両は、留札を当てた者にしか支払われぬ。何か策を授けたのだろうか、留札は六万枚の中のたった一枚。まさか、それを当てることできるとは思っていないだろう」

意味がわかりませぬと鶴松が繰り返した。哀れよの、と鳥居はその顔に唾を吐きかけた。

「何をしたところで、蟪蛄の斧である。奉行は私で、ここで私に指図できる者はおらぬ。与力も同心も、私の命には服さざるを得ぬ。お前のような浪人と役者崩れに、何ができると？ 何もかも正直に吐けば、お上にも慈悲の心があることを教えてやらぬでもない。死罪を免じて遠島ということにしてやろう。どうだ？」

何の理があつてわたしを死罪に言うのです、と鶴松が傷だらけの足で立ち上がった。太い木の格子を挟んで、二人の顔が向き合った。

「目明かしたちを打ちすえたことは認めます。ですが、殺めるどころか傷ひとつつけてはおりませぬ。有り体に言えば、よくある喧嘩沙汰に過ぎませぬ。それを死罪や遠島とは、いかに町奉行とはいへあまりにも——」

吟味役を務めるのは奉行である、と鳥居は冷笑を浮かべた。

「そして科人とがびとを裁くのも奉行の役目。お前が何を言おうが、私が裁可すればお前は死罪。抗あらがつても無駄なのは、よくわかつてるはずだ」

わたしは何もしておりませぬ、と鶴松が声を振り絞って叫んだ。

「牢の皆様、聞いてください！ 南町奉行鳥居耀蔵様は無実の罪で矢部鶴松を裁こうとしています。同心殿、この声が届いておりますか？ 助けてください、わたしは何もしておりませぬ！」

顎をしゃくった鳥居の前に出た蛭仁が、火事が起きた時のために置いてある手桶の冷水を鶴松の体に浴びせかけた。

悲鳴と共にその場にうずくまった鶴松に、何杯も何杯も手桶の水を浴びせた蛭仁が荒い息を吐いた。

鳥居様、と様子を見ていた同心がおそろるおそろる声をかけた。

「旗本の高梶殿たかじがお見えになったそうです。いかがなさいますか」
今何時だと尋ねた鳥居に、巳みの正刻（午前十時）です、と同心が答えた。

ずいぶん早いな、と鳥居は口元を歪めた。

「湯島千両富は牛の正刻（昼十二時）に始まる。まだ一刻（二時間）あるが……まあいい、高梶殿を支度部屋に通せ。他にも客が来るが、わかっているな？」

承っております、とうなずいた同心が出て行った。

命拾いしたな、と鳥居は倒れたままの鶴松に声をかけた。

「お前のことなど、どうにでもなる。日が暮れたら、また来る。その時まで息があればいいが……蛭仁、一緒に来い」

へい、と蛭仁が背後に回った。凍え死ぬかもしれないな、と鳥居は外に出たところでつぶやいた。ちらちらと雪が舞っていた。

三

すまねえな、と團十郎は上野の廃寺の太い柱に縛りつけた法良を片手で押んだ。

いったいこれは、と法良が首を左右に向けた。

「まさか、あなたは七代目市川團十郎？ どのようなおつもりで、このようなことを……神罰しんばつが当たりますよ」

そうならねえように祈ってくれねえか、と法良の僧衣に袖を通してながら團十郎は言った。

「あなたにや何の恨みもねえ。あつちの小坊主にもだ。悪いとは思っているが、宿縁だと思つて堪えてくれ……うう、寒い。ずいぶん薄着だな。坊主つてのは、寒くねえのか？」

それも修行ですと答えた法良に、團十郎は自分の着物をかけた。少し離れた床の上に、手足を縛られた二人の小坊主が転がっている。

五人の小柄な男が、それぞれ抱えていた布きれを小坊主の体に巻

き付けていた。

「ずいぶん手際がいいな、おめえさんたちは」

寛永寺から出てきた法良、そして二人の小坊主をつけていき、人気がないところで一気に襲い、縄で雁字搦がんじがらめにしたのは五人の軽業師だった。

寄席で曲芸を演じるが、小柄ながら腕力が強い。法良は柄こそ大きい非力で、小坊主はまだ子供である。取り押さえるのはさほど難しくなかった。

三人を抱えて廃寺に入り、嚴重に縛り直した。大晦日、しかも雪が降っている。廃寺を訪れる者など、一人もいないだろう。

「あれか、本職は人さらいか？」

團十郎の軽口に、男たちが薄笑いを浮かべた。法良たちのことを頼む、と團十郎は着替えを終えた。

「不自由のないようにしてやってくれ。怪我なんかさせるんじやねえぞ。水と握り飯もある。小便したいと言ったら、それも何とかしろ」特にこいつは、と法良を指さした。「おれの着物を着てるからな。

小便で濡れた袴はかまなんざご免だよ。いいな？」

五人がそれぞれうなずいた。談志が集めてきた者たちで、咄家はなしかとは違い口が重かったが、信頼の置ける男たちだった。

「さて、それでだ。法良さんよ、陰富札はどこにある？」僧衣たもとの袂

を探りながら團十郎は尋ねた。「おかしいな、持ってねえわけがないんだが」

なぜ陰富のことを知っているのです、と法良が首を傾げた。

「……いえ、どうでもいいことですね。あれが目当てなら、二人に持たせています」

それはそれはとつぶやいて、小坊主の前に立つと、それぞれが自分の懐に目をやった。

失礼するぜ、と手を突っ込み、團十郎は五枚ずつの陰富札を抜き出した。

「寛永寺は金があるな。十枚ってことは……千両か。他には持ってねえな？ それならそれでいい、しばらくの辛抱だ。日が暮れたら、縄を解いてやる。安心しろ、おめえらをどうこうするつもりなんかねえ」

何のためです、と法良が叫んだ。

「わたくしはご住職に命じられ、名代みやうだいとして陰富に加わっているだけですよ。こんなことをして、ただで済むと思っっているのですか？」

思っちゃいねえよ、と團十郎は法良の青光りしている尖とがった頭を軽く叩いた。

「だが、そつちにも臍はらに傷があるのを忘れるんじゃないぞ。陰富は天下のご法度はつと。寛永寺といえは、開基かいきは三代將軍徳川家光公、そし

て徳川將軍家の菩提寺だ。そこのご住職が陰富ほだいに手を出していたと知られたら、困るのはそっちなんじゃねえか？ 事と次第によっちゃあ、寛永寺が潰されるかもしれねえぞ。おれなら死ぬまで黙っているがな。それじゃ、あばよ」

廢寺の門を開くと、いつの間にか雪は止んでいた。地面にうっすらと雪が積もり、辺りは一面真っ白だった。

寒いのは苦手だとこぼしながら、團十郎は駆け出した。巳の正刻（午前十一時）になっていた。

四

太鼓たいこの音が鳴っている。湯島天満宮の境内、そしてその周りには人で溢れんばかりだった。人の波が押しでは引き、引いては寄せている。

江戸中の人が集まっているんじゃないか、と離れた場所からその様子を眺めながら、談志はつぶやいた。

巳の正刻である。あと半刻（一時間）後に、湯島天満宮千両富が始まる。

境内には老若男女の人が溢れ、押し合いへし合いを繰り返していた。人死に出るのではないか、と思えるほどの混雑ぶりである。

無理もねえ、と談志は小さくうなずいた。幕府が富籤興行とみくじの禁止を布告したのは、半年以上前だ。

翌天保十五年一月一日より、寺社の富籤興行を禁じるということだったが、庶民にとって夢のひとつが消えるのと同じである。

これが最後ということもあり、過去に例がないほどの人出となっていた。

庶民といっても、町人だけではない。半分ほどは武士である。江戸に暮らす多くの武士が貧しいのは、誰でも知っていた。

(それにしても、ここまでの人出とは思わなんだ)

舌打ちをしたが、ある程度予想がついていたから、それほど不安はなかった。

團十郎が蛭仁その他四人の目明かしの名前を聞いていたので、家を探すのは簡単だった。昨夜のうちに人を出し、見張らせている。目明かしたちが家を出たら、そのままつけることになっていた。

いつもは見張る側の目明かしたちは、自分が見張られているとは夢にも思わないだろう、と談志はほくそ笑んだ。

老中水野忠邦みずの ただくにがその側近である鳥居耀蔵の進言により、江戸中にある寄席のほぼすべてを廃業に追い込んだのは、約二年前、天保十二年二月のことである。

贅沢ぜいたく、奢汰禁止しやたという改革の方針は理解できるとしても、寄席を

潰すことに何の意味があるのか、いくら考えても談志にはさっぱりわからなかった。

水野も、そして鳥居も、ただ庶民から楽しみを取り上げたかっただけなのだろう。その根底にあるのは、庶民たちが喜び、笑う姿が許せないという一点に尽きる。

家康公の頃に世を戻すというのが改革の柱だったが、家康が聞いたら驚いて腰を抜かしただろう。庶民のささやかな夢を奪うほど、愚かな將軍ではなかったはずである。

寄席が潰れば、咄家をはじめ、演者たちはすべて職を失うことになる。それを救済するつもりは水野にも鳥居にもまったくなかった。芸人風情などどうなってもいい、と思っているのだろう。

咄家になった者は、芸でしか身を立てられない。咄家に限らず、芸事をする者は皆同じである。

それは自分でもどうしようもない生まれつきの性さがであり、談志も己の芸に誇りを持っていた。

一朝一夕で身につけたものではない。苦しい修業に耐え、ようやく手に入れた技だ。講談師、手妻てづま使い、軽業師、音曲師おんぎょく、誰もが同じである。

それを一片の禁令によって取り上げられ、おまけに庶民の楽しみを奪ってもいる。非道といえは、これほど非道なことはない。

歌舞伎役者、芝居小屋の小屋主、読本作家、あるいは吉原の太夫たゆうや水茶屋の娘たちも同じである。

風紀の乱れを正すためというが、そんなはずがない。庶民など生かされているだけでありがたく思え、武士のためにただ働いていればいい、そう考えていなければ、あのような禁令を出すはずがなかった。噺家の職を失った後、談志は細々と溜めていた金で蝸牛長屋の大家になった。そこに転がりこんできたのが矢部鶴松である。

息子と言うより孫に近かったが、何となく馬が合った。浪人の身となった鶴松は古本の商いで生計を立てていたが、長屋にいることが多く、よく話すようになった。

鶴松が前南奉行所矢部定謙の養子だとわかり、愚痴を言っている時、失脚して老中の座から降りた水野はともかく、権勢けんせいを欲しいままにしている鳥居耀蔵にひと泡吹かせてやりたいと冗談のつもりで漏らすと、わたしも同じですと鶴松がうなずいた。それがすべての始まりだった。

もともと、鶴松にはその企みがあったのだろう。鳥居のことを詳しく調べていたし、陰富についても知っていた。

取り置き金の百万両を奪うための策も立てていたが、それを実行するためには人手が必要だった。

追いかけるように蝸牛長屋にやってきたお葉と共に、信頼できる

者を集めようとしたが、鳥居への恨みを晴らそうじゃねえかと言っただけで、数百人の者が手を貸すと申し出ていた。

どう抗っても、幕府、そして町奉行にかなうはずもないが、からかうことはできる。

集まってきた者たちの中にあるのは悪戯心いたずらであり、談志もそれではないと思っていた。金のためではない。江戸っ子の心意気を見せてけられれば、それでいい。

(細工は流々、仕上げをごろうじろ、か)

押し寄せてくる人の波を避け、その場を離れた。振り向くと、湯島千両富の開始を告げる鐘の音が鳴っていた。

五

寛永寺の僧、法良でございませと南町奉行所の門衛に深々と頭を下げると、門がゆっくり開いた。

当たり前だ、と團十郎はつぶやいた。顔や姿形は瓜二つだし、着ている僧衣も法良のものである。疑う者など、いるはずもなかった。

だが、背後で門が閉まる音を聞いた時、背中を冷や汗が伝った。生きて門を出ることができるのか、それはわからなかった。

案内されるまま支度部屋に入ると、そこに九人の男たちがいた。

一人一人の前に膳部ぜんぶが置かれ、山海の珍味ちんみと酒が用意されている。遅いではないか、と声をかけてきたのは日本橋で呉服を扱っている白山屋の番頭、伸輔しんすけという中年の男だった。他は皆武士ということもあり、遠慮せざるを得ない。僧である法良には話しかけやすかったのだろう。

相済みませぬ、と團十郎は両手を合わせた。白山屋の主人、白山けいのすけ慶之介も寛永寺の檀家だということは、調べてわかっていた。

「ご住職はどうしている？ 先月お参りに伺った時は、風邪をひいたとか、そんなことを言っていたが」

物言いが上からなのは、年齢が上ということもあるが、檀家として寛永寺に多額の供養料を納めているためでもあった。

白山屋は先々代の頃から商いを広げており、江戸市中に十店舗を構える大店おわたなである。その番頭を務める伸輔には、他人を下に見る癖があるようだった。

「陰富札は何枚買ったのかね」

十枚でございますと答えると、そんなものか、と大きな目玉を左右に動かした。

「寛永寺といえは將軍家菩提寺ではないか。金子きんすなど、いくらでも用立てることができたろうに。もつとも、ご住職あかにしは赤蜺のしわいやで知られたお方。十枚というのも、わからんではないな」

赤蜆もしわいやも、けちを意味する言葉である。

白山屋様はどれほどでございましょうと尋ねると、百枚よ、と胸を張った。

白山屋ほどの大店ともなると豪儀なものだ、と團十郎は内心舌を巻いた。一枚百両の陰富札を百枚買ったということは、総額一万両を投じたことになる。

もつとも、江戸で裕福なのは大店の主人と相場が決まっていた。

一万両など、はしたがね端金なのだろう。

それにしても十枚とは少ないな、と猪口ちよこに酒を注いだ伸輔わらが嗤った。目が赤くなっているが、少し酔っているようだった。

「他のお武家様は数十枚、百枚というお方も少なくない。お奉行の鳥居様など、三百枚を買ったとか。今日で陰富も終わりだから、何としてでも留札を当てねばならぬということもあるのだろうか」

賭場に集まっている他の賭け手たちは、大名の重臣、旗本、御家人たちである。これまで長きにわたって鳥居の陰富に加わっていたが、その間に使った金子はそれぞれ莫大な額だ。

寺社における富籤興行の禁止が決まった今、今日がすべてを取り戻すことのできる最後の機会だと誰もがわかっている。

酒や肴に舌鼓を打ち、笑みを浮かべて歓談しているが、誰の目も血走っていた。

ここで負けたら、もう金を取り戻す術はないのだから、必死にならざるを得ない。既に賭場は鉄火場と化していた。

しばらく伸輔と話していると、支度部屋の奥の襖ふすまが音もなく開き、瘦身そうしん、小柄な鳥居耀蔵が姿を現した。

そのまま襖を背に着座し、お運びいただき真にありがとうございます、と軽く頭を下げた。

「さて、全員揃われたようですが、皆様陰富札はお持ちでしょうか。

お忘れになったという方は、残念ながら本日の陰富には加われませぬ。札をお確かめください」

その必要はない、と唸うなるような声でした。鳥取藩江戸家老、河田景与かわたかげともである。

「そのような間抜けがここにおるはずもない。奉行の氣遣いはわからぬでもないが、無用であろう」

鳥取藩は石高三十二万石の大藩で、外様大名だが松平姓と葵紋あおいもんを下賜かされるなど、親藩に準ずる家格である。

集まっている十人の賭け手の中で、その立場は最も重い。ごもつともなことで鳥居はうなずいたが、さすがに遠慮せざるを得ないのだろう。

遠くから鐘の音が聞こえた。正午です、と鳥居が言った。正午と
いうのは午の正刻で、昼十二時を指す。

「たった今、湯島天満宮で千両富が始まったところでしよう。半刻以内に最初の頭の文字を知らせる使いの者が参ります。それまではごゆるりと酒や肴をお楽しみいただければと。芸者も呼んでおりますゆえ、しばしお待ちを」

何だと思う、と隣の伸輔が囁いた。

「湯島千両富には、六万枚の富札がある。すべてを一度に富箱に入れて突くわけにもいかないから、まず頭の文字を突くのが定法だ。松竹梅福祿寿、さてどうなることやら」

湯島千両富も他の富籤興行と同じく、百回突きである。そのため、万の位から一の位まで、五回に分けて富箱を変え、百回突きを行なうが、これは六万枚もの富札を一度に収めることができる大ききの富箱がないためである。

最初の百回突きで決まるのは、万の位の頭の文字が、松竹梅福祿寿、いずれになるかである。一番に突かれた富札、その後十を区切りに十枚の富札が、それぞれ檣さかの上にある立て細額に貼り出されるが、これは小当たりの籤である。

六万枚の富札のうち、当たり籤が最後の留札だけというのでは、興行にならない。一等、二等というように、仕来りに則り、十枚の当たり籤を決めるが、他に組違いや前後の番号にも、それぞれいくばくかの褒美金が支払われる。

一番、十番、二十番と、十回突くたびに、それが小当たりの籤の頭の文字とされた。

ただし、最も重要なのは百回目に突かれる大当たりの留札であり、その籤を買った者が千両を褒美金として受け取る事になっていた。湯島天満宮に集まっている数万の人々が注目しているのは、留札だけだと言っている。

千両富だから、褒美金は千両である。庶民にとっては夢そのものといっている大金だ。

焦ることはないでしょう、と手元の膳部を引き寄せ、團十郎は沢庵わんを口にほうり込んだ。

「何しろ百回突きです。それなりに刻もかかるはず。留札の頭の文字が突かれるのは半刻後（一時間）かと存じます。それまでは待っているしかありません。取らぬ狸の皮算用、と昔から申します。今から何が出るか考えても、意味などありませんまい」

坊主の話は説教臭くていかん、と伸輔が手を振った。違えねえ、と團十郎は内心苦笑した。

陰富は博打である。博打では勝つことが何よりも大事だが、そこに至る過程も楽しむことができた。

今回の湯島千両富に関して言えば、自分がなぜその番号を選んだのか、根拠は何か、直感か、それとも過去の出目に照らし合わせて

弾き出したものか、それとも偶然の閃きか。

生まれた月日に合わせるものもいれば、毎回決まった番号を買う者もいる。酒を飲みながらそれを話すのもまた一興、というのが賭場の楽しみのひとつであろう。

だが、團十郎には何の謂れいわもなかった。持っている陰富札は法良から奪ったもので、番号は寛永寺の住職が靈感で導き出したものだ。あいつち相槌を打つぐらいしか、できることはない。

法良が持っていた陰富札の番号は、軽業師の一人が談志に伝えている。それは、必ず留札となる番号だ。僧衣の袂に入れている陰富札の番号を口にできないのは、そのためもあった。

当たり札を持っていることを鳥居に知られたら、どうなるかわからない。鳥居も総替ノ法によって、留札を手にすることができるのである。

最後には揉めるとわかっていたが、今からその種を蒔まいておくこととはない。謀はかりごとは密なるをもつて良しとする、ともいう。

團十郎はただ微笑むだけで、それきり口をつぐんだ。

六

寛永寺本堂の前にしつらえた三段組の櫓の上に、十人の神主が現

われ、目を閉じたまま経を唱えていた。

富籤は神事であり、神への奉納儀式である。実際のところは博打なのだが、膏藥こうやくと言いつつ、訳は何にでもくつつくよね、とお葉はつぶやいた。

経を唱えていた神主たちが下がり、代わりに帯刀した二人の武士が櫓に上がった。周りからの大歓声に、お葉は思わず耳を塞ふさいだ。

今、上がってきたのは寺社奉行である。富籤興行は寺社の中で開かれ、それを管轄するのは寺社奉行であった。

境内にいる大勢の老若男女の客たちが声を上げたのは、湯島千両富が始まる刻限になったためである。

富籤における富突きには、複雑な手続きがある。神主たちによる御清めの読経もそのひとつだが、何よりも富札、そして富箱の確認が重要だった。

湯島千両富では、まず万の位となる頭の文字、松竹梅福祿寿を突くが、ひとつの富箱にそれぞれ百枚ずつ、計六百枚の木製の札を納め、それを突いていく。

文字のどれかに偏りがあってはならないし、一枚多いというだけでも結果に影響が出るだろう。

何しろ、留札の褒美金は千両という大富籤である。一獲千金というが、裏長屋に住む者でも千両を手に入れることができるかもしれない

ない。まさに庶民にとっては夢の興行であった。

一両、二両ならともかく、千両である。どのような形でも間違いがあつてはならない。

もし不審な事があれば、境内、そして取り巻いている数万人の客たちが、湯島天満宮そのものを打ち壊すことになるだろう。止められる者など、いるはずもない。

寺社奉行と湯島天満宮の神主により、まず松竹梅福祿寿の富札百枚ずつが数えられた。一枚、二枚と声を張り上げて数えるため、しまいには寺社奉行の喉が哽れたほどである。

次に富箱改めが始まった。富箱の蓋を開き、寺社奉行と神主が中を確かめ、更に満場の客に向けて中に何も入っていないこと、細工の跡がないことを見せていった。

イカサマがあるとすれば、富箱そのものに仕掛けが施されているはずで、何も無い、ということをお客たちに得心させねばならない。

富箱の中を見ているのは、そのためである。

それだけでは終わらない。今度は突き手改めである。

富箱の蓋には細い格子の枠があり、その間から突き手が錐状の棒で中の富札を突くのだが、突き手が意図的に特定の文字、数字の富札を狙って突くこともあり得ないとは言えない。

そのため、突き手は白い目隠しをすることになっていた。通常の

富籤興行ではそこまでしないが、何しろ千両富なので、どこまでも徹底しなければならないのである。

目隠しをする布を寺社奉行と神主が確かめ、目を固くつぶらせた上で二重にして縛った。厳重過ぎるほどだが、やむを得ないところだろう。

もつとも、湯島天満宮の側にイカサマをする理由はない。六万枚の富札を売った時点で、利は確定しているのである。無茶なイカサマを仕掛ければ、かえって損になるのは目に見えていた。

それでも一連の改めを行なうのは、やはり神事だからである。伝統として、慣習として、昔ながらの仕来りを守ることが、湯島天満宮、そして寺社奉行にとって何よりも重要だった。

約束事、と考えるもいいだろう。特に寺社奉行は役人なので、前例を踏まえなければならない立場でもあった。

この日のために設営された檜の上で、色とりどりの煙が上がっていた。線香の類で、その香りが辺りに漂い、荘厳な雰囲気醸し出していった。

お葉は湯島天満宮を八町（約八七〇メートル）ほど離れた丘の上から見ていた。雪が止み、晴天になっていたため、空気は澄んでいった。とんでもない数の人だ、と改めて思った。

檜の上からかすかに雅楽の音色がくが聞こえ、同時に太鼓が打ち鳴ら

された。いよいよ始まる、と強く手を握りしめた。

百回突きと簡単に言うが、一度突いては富札の文字を確かめ、それを溢れんばかりの客たちに伝えなければならぬ。

また、その富札を櫓に組まれた奉納額に納めるということもある。百突き目の留札の頭の文字が出るまで、半刻ほどはかかるだろう。

鳥居耀蔵の顔を思い浮かべて、お葉は男のように舌打ちした。父から筆を取り上げたあの妖怪。

もともと気が小さかった父は、手鎖に怯え、家に閉じこもるようになり、浴びるように酒を飲み、そのまま死んでいった。

悪い人ではなかった、とお葉は父の顔を頭に思い浮かべた。変人ではあったが、優しい人柄で、一人娘のお葉を可愛がることしか考えないような、子煩悩な男だった。

読本など、下らぬものを書くからだ、と鳥居が吐き捨てたことは、昨日のように覚えている。

何の役にも立たないつまらぬ人情本など、誰が読むというのか、そうも言っていた。

世間では鳥居耀蔵の悪賢さ、頭の鋭さが怯えと共に囁かれている。鶴松も、團十郎も、談志も、鳥居を恐れていた。

そんなことはない。どれだけ頭がいいか知らないが、あの男は大馬鹿だ。

儒官林家の出である鳥居は、学問も深く、知識は膨大で、教養もあるだろう。だが、人の心がわからない者は大馬鹿だ、とお葉は知っていた。

所詮、妖怪は妖怪である。人の心を解することはできない。

ただ真面目なだけで、人がなぜ笑うのか、その意味すらわからないのだろう。人が楽しそうにしている理由がわからないから、それを許せない。そういう男だ。

人情も、愛も、憎しみも怒りも優しさも、何もかもがわからない哀れな男。それが鳥居の正体だ、とお葉は見抜いていた。

そんな化け物を許してはおけない。女がすたるといふものだろう。まずは万の位、とつぶやいて丘を降り始めた。仕掛けはすべて打つてある。当たるか外れるか、それはわからない。

誰もが博奕に夢中になる理由がわかった、とお葉は微笑んだ。のるかそるかの大勝負。多くの者がすべてを賭けている。

鶴松と團十郎は、ひとつしかない命を張っているのだ。面白くないはずがない。

(見てろよ、大馬鹿野郎)

頬に笑みを浮かべたまま、お葉は歩を速めた。

九十九、と天地を揺るがすような大声がした。猫屋の勝蔵は辺りを見回し、梅、と細い筆で帳面にひと文字書いた。

一番札に始まり、区切りの十番ごとに当たり文字があるが、念のためすべてを書いておくように、と命じたのは鳥居である。

相変わらず細かいお人だと苦笑したが、町奉行の下で働く同心に雇われている身の目明かしとしては、従うしかなかった。

(いよいよ次だ)

櫓の上では、白装束の突き手が肩で息をしていた。湯島天満宮は神社で、祭られているのは天乃手力雄命あまのたちからおのみことと菅原道真である。

突き手は神の代理として富札を突いているから、体力というより気力の消耗が激しいのは、見ていて勝蔵にもよくわかった。

師走晦日だというのに、全身から滝のような汗が流れ、それが湯気となって突き手の体を覆おおっていた。

湯島千両富では、五回に分けて富札が突かれる。その度に突き手は交替するが、それも当然だろう。今にも倒れるのではないかと、心配になるほどだった。

経を唱えた神主の指示で、目隠しをしたまま突き手が富箱を突い

た。突き棒に刺さった富札を取り上げた神主が、松、とひと声叫んだ。

同時に、周囲から凄まじい叫び声と落胆のため息が押し寄せてきた。

六万枚の富札が売りに出され、数人で購入している者たちもいるから、十万人以上が湯島千両富に注目している。人生を懸けている者もいるはずだった。

叫び声は松の札を買った者たち、ため息はそれ以外の札を買った者たちである。

仕方ねえだろう、と勝蔵は口の中に溜まっていた唾を地面に吐いた。

富籤というが、要は博奕である。松を選ぶか、竹を選ぶか、他の文字を選ぶか、それは富籤を買った者の運だ。

だいたい、まだ留札が決まったわけではない。単純に考えても、六人に一人は松の札を買っているはずだし、頭の文字が決まったからといって、留札になるわけでもない。一喜一憂していたら、身が持たないだろう。

いずれにしても、勝蔵には関係のないことだった。すぐに湯島天満宮を出て、南町奉行所へ走り、頭の文字が松だと門衛に伝えねばならなかった。

「おい、さつきから何をしてやがる」

小柄な白髪頭の老人が勝蔵の肩に手を掛けた。離せよ、と言った時、^{すり}掏摸だ、と老人が割れんばかりの大声で叫んだ。

「誰か、誰か来てくれ。こいつは掏摸だ。おい、あんたらも懐は大丈夫か？ 畜生、財布がねえ。こいつがすりやがったんだ！」

おれも、あたしも、という声が四方から上がった。捕まえてくれと叫んだ老人の肩を突いて、その場を離れようとしたが、目の前に人の壁が立ち塞がっていた。

掏摸だ、と全員が一斉に叫んだ。そいつは言い掛かりつてもんだ、と勝蔵は怒鳴った。

「おれを誰だと思つてやがる。こう見えても南町奉行所の目明かしだぞ。掏摸なんかするわけねえだろうが」

あたゐ、見てましたと小柄な町娘が震える手で勝蔵を指さした。

「この人、あのおじいさんの懐から財布を抜き取っていました。間違ひありません！」

足を払われ、勝蔵は地面に倒れ込んだ。手足を取り押さえられ、懐を探られると、見覚えのない財布がいくつも出てきた。

こいつは俺んだ、と背の高い若い男が勝蔵の背中を踏み付けた。

「てめえ、やりやがったな！ 何が目明かしだ、このごまの蠅が^{はえ}。

おいらは町火消^{ひけし}、は組の塩助^{しおすけ}つてもんだ。一緒に来やがれ、寺社奉

行に突き出してやる！」

立ち上がるうにも、腕や脚を押さえ付けられているので、身動きが取れない。

違う、と勝蔵は首だけを上げて叫んだ。

「おれは猫屋の勝蔵、南町奉行所の城山同心の手の者だ。間違いない、十手だつて持つてる」

どこにだ、と塩助が右腕を離した。慌てて懐に手をやったが、そこに十手はなかった。

やつぱり嘘だったんだな、と塩助が怒鳴った。

「てめえみてえな人相の悪い野郎に、奉行所の目明かしなんざ務まるはずがねえ。おい、誰か紐を持ってねえか。こいつをふん縛つて、寺社奉行に突き出すんだ。ついでだ、逃げ出せねえように身ぐるみ剥いじまええ！」

四方から手が伸び、勝蔵の着物をびりびりと破った。あつと言う間に丸裸になった勝蔵を指さして、大勢の男女が手を叩いて笑った。

「てめえら、ふざけんじゃねえぞ！」下半身を手で隠しながら勝蔵は左右を睨みつけた。「すぐに身の証しを立てて、てめえら全員――」

掏摸のくせに偉そうなこと言ってるんじゃないよ、と丸鬚まるまげを結つた年増の女が脱いだ草履で勝蔵の頬を張った。

「こんな時は何て言うんだい？ 尋常にお縄につけ、だっけ？」

女が言い終わらないうちに、本当に縄で体を縛られた。
抗うこともできないまま、勝蔵は湯島天満宮の外に引きずり出されていった。

八

のんびりした足取りで、談志は八丁堀の辺りを歩いていった。
未の上刻（午後一時）である。いつの間にか、また雪がちらつき始めていた。

今頃、湯島天満宮では最初の百回突きが終わっているだろう。最後の留札の頭の文字、つまり万の位が松竹梅福祿寿のどれなのか、談志にはわかっていなかったが、それはどうでもよかった。

寛永寺の僧、法良と小坊主を廃寺に閉じ込めた軽業師の一人が、その後談志の元に走り、法良が持っていた十枚の陰富札の番号をすべて伝えていた。

陰富札の買い方は、大きく分けて二通りある。バラの番号を買い、か、連番と呼ばれる続き番号で買うか、そのどちらかだ。

寛永寺の住職がどちらを選んでいたのはわからなかったが、軽業師が書いていた番号は連番だった。

松・ハ・七・ト、最後の一桁は空（〇）から九まで、ひと繋がり

になつていた。

鶴松が策を立て、談志とお葉が手を貸してくれる者を捜した。鳥居に恨みを持つ者はいくらでもいたが、ざつと挙げれば咄家、寄席の芸人、読本作家、版元、吉原の娼妓しやうぎ、水茶屋の娘たちである。

細かく言えば、寄席の下足番や、吉原で生計を立てていた太鼓持ち、版木職人など読本や浮世絵に関係する職につく者もそうであり、声をかけただけで数百人があつと言う間に集まつた。

湯島天満宮で突き手が留札に何を突くのか、わかるはずがない。

談志は松・ハ・七・トの九を留札にする、と決めていた。

理由はない。軽業師が書いてきた紙の一番最後に、その番号があつたからである。

数百人の仲間にそれを伝えるよう軽業師に頼み、自分は湯島天満宮を離れた。

鳥居が配置した目明かしたちの足止め策は、鶴松と十分に練つていた。あとは自分が鳥居に頭の文字が何だったのかを、いかにうまく伝えるか、それだけだ。

難しいとは思つていなかった。何しろ咄家である。口舌が命の商売だから、舌先三寸で丸め込むことなど、いっそ簡単過ぎるくらいだった。

数町歩き、南町奉行所の前に出た。門は固く閉ざされ、厳しい顔

をした二人の門衛が立っていた。

よろしゅうございませうかと腰を屈めた談志は、わざとしわがれた声で言った。

「あたしはおはなしやの忠兵衛と申しますが、本日の湯島千両富で、猫屋の勝蔵様とおっしゃる目明かしの方に、言付けを頼まれております。町奉行の鳥居様に『頭の文字は松』と伝えればわかるかとか……」

二人の門衛が顔を見合わせた。鳥居の陰富について、詳しくは聞いていないはずだが、ある程度のことは話があったのだろう。

門衛を務めているのが同心なのは、江戸の者なら誰でも知っている。代々続く与力とは違い、同心は一代同心といって、子孫に家督を譲ることができるかどうか、そこは奉行の腹ひとつだった。そのため、奉行の機嫌を損じてはならないという意識が強い。

目を見交わして相談していた二人のうち、大柄な男が小さくうなずいて、潜り戸から奉行所の中へ入っていった。鳥居に番号を伝えるに行ったようだ。

お勤めご苦労様でございます、とひとつ頭を下げてから、談志はその場を離れた。

大芝居が始まった。さて、ここからどうなるか。

しまいまで観させてもらうぜ、と談志は皺だらけの顔に笑みを浮かべた。

(つづく)